

安藤良雄氏の人と学問

——追悼のことば——

加藤俊彦

一

安藤良雄氏は一九八五年五月六日、心不全のため永眠された。八四年一〇月五日、大学設置認可申請の調査のため出張中の名古屋で突如心筋梗塞のため倒れられてから約半年あまり御家族や医師団の懸命な努力もむなしく逝かれたのである。古い友人の一人として、成城大学経済学部の機関誌「経済研究」の編集委員からの御依頼を機会に、安藤氏との交友関係を回顧し、氏の人柄と学問について述べ、哀悼の意を表すこととした。

私にはひとつの錯覚がある。それというのは東大経済学部の演習室で土屋喬雄先生のセミナーに安藤氏とともに出席していたという記憶である。しかし氏の還暦を祝って刊行された論文集「日本資本主義 展開と論理」の巻末に附された「略年譜」によれば氏は一九三九年四月に東京帝国大学経済学部経済学科に入学されており、私は同年三月に卒業している。したがって演習室で顔をあわすことはなかったのであるが、それにもかかわらずこのような記憶があるのは、若い時に氏とあまりに親しく顔をつきあわしていたからかもしれない。事実、私の勤

安藤良雄氏の人と学問

安藤良雄氏の人と学問

務していた土屋先生の主宰する明治大正金融史資料編纂室には、氏はよく顔を出しておられた。

いま安藤氏の履歴をふりかえってみよう。

氏は一九一七年七月二日、父君の任地広島市に誕生された。父君は大蔵省の役人をされており、退官されたのちは台湾銀行の重役となられたと聞いている。安藤氏は長じて東京高等師範学校附属中学校に学ばれた。附属中学といえは東京の名門校で著名な人物を学界や財界におくりだした事で有名である。安藤氏はここを卒業してから東京の高校にすまれることなく一転して東北の弘前高等学校に入学した。あまりに都会っ子になることを避けるため地方の高等学校を選んだからだ、と聞いている。たしかに安藤氏はいかにも都会人らしい風貌の持主であつたが、それでも時に冗談に津軽弁をまねて、それが案外板についていたのは高校時代の弘前生活の賜物であつたのかもしれない。

東大にすまされてからは氏は土屋喬雄先生のセミナーを選ばれた。当時の雰囲気としてはアカデミシアンになるうとするのであれば土屋先生のセミナーを選ぶことは必らずしも適當な道ではなかった。何故なら土屋先生は当時「左翼的」ということで、先生の指導をうけることは大学での地位を得るのには好都合とはいひ難かつたからである。しかし氏はそうした事に拘泥することなく敢えて土屋先生を師と選んだ。それというのも安藤氏はなによりも歴史学を愛しており、さらにファシズムを極端に嫌悪し、自由をこよなく愛して、土屋先生を抑圧する勢力に強い反感をもっていたからであらう。

安藤氏が歴史学を好んだのはすでに中学時代からのことのようにである。私は一時、東京高師の教授であつた時期があるが、当時木代修一氏という年長の歴史学の教授がおられた。木代教授は附属中学で歴史を教えておられ

た事があり、その教え児のなかに安藤氏がいた。木代教授は安藤氏の歴史学者としての才能を高くかい、常に私に「安藤君は歴史が好きで、歴史学者として大成する素質をそなえていた」と語っていた。こうして安藤氏は土屋先生のセミナーを選び、四一年二月に抜群の成績で卒業された。

二

東京帝国大学経済学部を卒業後氏はただちに同学部の助手に就任された。土屋先生のセミナーに参加しつつも助手に就任できたのは抜群の卒業成績がものをいったからであろう。氏は卒業を前にして日本銀行の入行試験を受けこれも見事に突破している。これも抜群の卒業成績の成果だったといえよう。しかし氏はためらうことなく銀行家の道ではなく研究者としての道を選び助手に就任した。

もっとも助手に就任したとはいえ同時に海軍に応召した。後年堂々たる体躯の持主となった安藤氏もその頃は華奢な青年であった。おそらく戦時でなければ軍隊にとられることはなかったであろう。短期現役というのであろうか、正式の名称は私にはよくわからないが、とにかく短期間で氏は海軍将校となった。しかし軍艦に乗り組むことはなかったように記憶している。陸上で海軍省に勤務していたようである。

この時期安藤氏はよく土屋先生を訪ねて明治大正金融史資料編纂室にこられた。この長たらしい名前の編纂室は実は土屋先生が主宰されていた。安藤氏の卒業後土屋先生への当局の圧迫はひどくなり結局先生は経済学部を休職処分となった。先生の親友である渋沢敬三氏―紹介の必要はないと思うが、日本資本主義の指導者、渋沢栄一の孫にあたり、当時第一銀行の首脳者、のち日銀総裁、大蔵大臣となる―はこれを憂慮され、第一銀行から当

安藤良雄氏の人と学問

時のお金で二五万円を東大経済学部へ寄附させ、土屋先生を主宰者として明治・大正期の金融史資料の編纂にあたらせるよう取計られたのである。ちなみにいえば当時農業団体に勤務していた私は先生に御願してこの仕事の手伝いをさせていただくこととした。

この編纂室はじめは東大経済学部の研究室の二階にあったが、のち東大図書館の二階に移った。海軍士官の軍服をスマートに着こなして安藤氏はよくこの編纂室にやってきた。そして土屋先生を相手に談笑し、時に先生が御留守のときは私達二人でいろいろ話しあった。

談話の内容はもちろん経済史学の問題もあったが、戦局が苛烈になるにしたがってともすれば戦争の推移が中心となった。私達経済学を学んだ者にとってアメリカの生産力に思いをいたせば到底太平洋戦争が勝利に終るとは考えられなかった。しかし何時、どのような形で敗戦をむかえるかは見当もつかなかった。私は海軍軍人である安藤氏にいろいろ情報や見透しを求めた。そのなかで今なおはっきりと記憶している事がある。

それは事が私事にわたるが結婚の期日のことである。偶然にも私たちは二人とも四四年のなかば頃結婚の話が具体化した。二人とも土屋先生に媒酌人を御願いすることとした。その期日の調整について話しあったとき、安藤氏は「九月のはじめにしましょう。貴君は九月三日に、私は一週間後の九月一〇日としましょう」ということであった。結婚式などは秋頃が適当と思っていた私は驚いた。しかし安藤氏によればアメリカ軍は六月のなかばにサイパンに上陸を開始しており、間もなく占領を完了するであろう、そして空軍基地の整備は二・三カ月で完成するであろう。そうなると一〇月には東京空襲が始まる可能性がある、残暑がきびしかろうが、九月はじめに結婚式を挙行するほうが安全だ、というのであった。私は氏の忠告にしたがった。おかげで空襲をくらわずに結

婚式を無事にすませることが出来たのである。

もっとも結婚後間もなく安藤氏は北海道方面に転任された。したがって日本が無条件降服をする頃には私たちははなればなれにくらしていた。

三

一九四五年八月一五日、太平洋戦争が敗戦に終って間もなく一〇月には安藤氏は復員してこられた。そして一時、前記の金融史料編纂室に籍をおかれた。翌年九月には経済学部の特任講義を担当され、さらに四七年三月には専任講師に、同年七月に助教授に昇任された。

敗戦直後の二、三年というものはまさに狂乱怒濤の時代であった。それまで威を誇っていた軍人や右翼の勢力が一挙に破砕され、言論は自由となった。私たちは自由のびのびとそれまで胸に秘めていたことを語り書いた。今にして思うと、まさに若気の至りともいうべきこともあった。

たとえば安藤氏のか、おで日刊工業新聞社の論説委員となった。顔ぶれは安藤氏のほか、現在法政大学教授の田代正夫氏と私、がくわわって三人であった。当時日本の工業は壊滅状態にありその再建が重要課題であった。われわれは大いに経済の民主化をとなえた。また私の古い友人が千葉県の県会議員に革新無所属で立候補したが安藤氏の原籍地が千葉県であったことから、私は彼を応援演説にひっぱりだした。当時はまだ国家公務員法ができておらず、国立大学の教官でも堂々と選挙演説ができたのである。たしか鴨川あたりと記憶するがわれわれはとにかく選挙演説をすませ、さらに部落の集会に出席し、反対派のさくらとおぼしき中年の人物からチクリチクリと

安藤良雄氏の人と学問

意地悪な質問をうけるはめとなった。私は困りぬいたが安藤氏はともかく適当にあしらって切りぬけていたの思いたす。

もっとも安藤氏はこうしたことには没頭していたわけではない。一九四六年一二月には、「日本戦時統制経済の一考察」という論文を「経済思潮」という雑誌にのせられた。今この論文が手もとにないので記憶をたどって書くしかないが、これは氏の処女論文としてかなり注目をあびた論文だったように思う。この「経済思潮」という雑誌自身、実業の日本社から刊行されあまり長く続かなかったように思うが、それでも発刊当時は若い経済学者たちの登竜門のような感じがあり、氏は早くもその第二輯に執筆されたのである。

この論文は時期からみて前記の経済学部の特設講義のエッセンスであろうと思われるが、同時にのちに続く氏の戦争経済研究の先驅をなしている点で注目されるべきものであった。

四

安藤氏は「現代経済史学」の創始者として著名であるがその学術論文の中心をなしているのは戦時統制経済や軍需工業を対象としたものである。その詳細は前記の「日本資本主義 展開と論理」の巻末にある主要著作目録をみてもらうほかはないが、氏は右の論文にひきつづき東大経済学部の機関誌である「経済学論集」その他に戦時経済や軍需工業に関する研究を発表している。たとえば「日本資本主義の一齣」とくに戦時においてあらわれたる基本的特徴について」（東京大学経済学部三十周年記念論文集第三部『国際経済の諸問題』四九年）や「旧日本軍事工業について―その序説（一）」（『経済学論集第二〇巻、第二号』五一年）や「戦時日本航空工業に関する二つの資料―

「第三回行政査察使報告」「渋谷中将口演要旨」―(『経済学論集』二三巻・二号五五年)などがそれである。

そのほか「物資動員計画」にも多大の関心をしめしつぎのような論文を執筆している。すなわち「輸送の崩壊と物資動員計画の終焉」(日本外交学会論「太平洋戦争終結論」五八年)、「日本戦時経済の一齣―成り立ち期における『物動計画』とその推移―」(矢内原忠雄先生還歴記念論文集、下巻、『帝國主義研究』五九年)、「日華事変下における日本經濟の矛盾―『昭和十五年年度物資動員計画』に関する資料を中心として―」(土屋喬雄教授還歴記念論文集『資本主義の成立と發展』『経済学論集』二六巻、一二号、五九年)等がそれである。このほか右の主題に関する論稿はいくつかあるが、これらを執筆しつつ氏は「現代経済史学」をつくりあげられたのであった。

本稿はもっとも安藤氏の諸論稿を追跡し、「現代経済史学」が如何にしてつくりあげられていったかを考究するものではない。それは安藤氏の指導をうけた若い世代の人達にならうべき課題である。私はただ大雑把な話をするにすぎない。それはともかく安藤氏はこれらの論稿を基礎にして一九五八年四月から五九年三月にかけて啓蒙的な「現代日本経済史」を「経済セミナー」に執筆し、さらに同誌に「太平洋戦争経済史」を五九年四月から六〇年一月にかけて連載し、これによって氏の「現代経済史」の体系が確立したとみて大過あるまい。そしてこの連載ものは一九六三年五月に種々改訂を加えられて「現代日本経済史入門」として刊行された。

この「現代日本経済史入門」は中位の版で五四〇頁程度のあまり浩瀚な書物ではない。題名も「入門」となっている。しかしこれはたんなる入門書ではなく私はこれは名著だと思ひ座右の書としていた。それというのは本書は安藤氏の諸論稿の集大成であるというだけでなく安藤氏の論稿の特徴がもっともよくあらわれているからである。

第一に本書の記述は正確無比であることである。このいい方は一見おかしいかもしれない。歴史学の書物は真実をつたえていなければならないことはいうまでもない。しかし案外、その正確さにおいて安心してたよれる書物は少ないのである。この点、本書は細心の注意が払われており、安んじて利用することができる。

さらに著者の視野がひろく叙述がたんに経済の基礎過程にとどまらず、労働問題、法律政治の分野にまで及んでいることがその特徴となっている。ひとつには本書が対象とした時期がいわゆる国家独占資本主義の時代であり、いきおい政治・法律の分野をも対象とせざるをえなかったことがその一因であろうが、そもそも安藤氏自身の方法が包括的であり総合的であることにも由来している。安藤氏は国家独占資本主義の時期にかぎらず日本の資本主義の発展をたんに経済的基礎過程を追跡するにとどめず政治問題に常に目をそそぎ、制定される諸法制にもしっかりと目をくばりつつ考察をすすめている。安藤氏の学説が包括的・総合的、ときには多義的といわれる所以であろう。事実この書物では原田熊雄の「西園寺公と政局」をはじめとして多くの政治家・財界人の回顧録等が縦横に駆使され政治的背景が明らかにされてそれが本書のふくらみを形づくっている。

また法律や行政制度についての叙述も精細をきわめている。一般に経済史の通史にあつては法律や行政についてはたんに指摘するにとどめている場合が多い。しかし本書においては重要な戦時統制に関する法律や通達はいちいちこれを本文でとりあげ、その意義を説明している。また戦時中にあつては行政制度はめまぐるしく変化し経済統制の管轄が刻々と変化する。これを正確に追跡することは面倒な仕事で容易なわざではない。しかし安藤氏はこれを刻明にあとづけている。私も時に戦時経済に関連した事項についても書くことがあつたが、その時は主として本書によりながら執筆するのが常であつた。

ところで本書は包括的であり総合的であり、時に多義的といわれようとも、その底には一貫した理論的立場があった。それはつぎの文章にあらわれている。安藤氏は「戦時経済をみる場合には理論的にいって軍需生産が『再生産行程外消耗』であることが常に銘記されなければならない。軍需工業はいちおう外面的に生産財生産部門に属するようにみえるのだが、生産財や消費財のうち国民（労働者）の生活必需品のように一国の再生産に寄与するものではない。有閑階級の奢侈品から何物も生産されないように、軍用機や軍艦・砲弾からは何物も生産されないのである」（同書、二三〇頁）と述べている。この視点は私の記憶に間違いがなければ、氏の最初の論文、前記の「日本戦時統制の一考察」から一貫してひきつがれてきたものである。安藤氏はこの視点につき、同論文を執筆する頃からよく私にその話をしていった。

五

「現代日本経済史入門」を公刊されてから一年後、六四年五月から雑誌エコノミストに「昭和経済史への証言」が連載されはじめた。それは単行本として「昭和経済史への証言、上（六五年一月）、中（六六年一月）、下（六六年八月）」の三冊にまとめられ毎日新聞社から刊行された。三冊いずれも三〇〇頁をこえる書物である。

これらは「昭和の経済史を、その初年にまでさかのぼってたずねてみる、しかもこの間におこった大きな事件とくにその決定的瞬間ともいえるべきときに当事者として主役ないし脇役を演じられた方に、あるいはこれを客観的立場にあつて冷静に観察しておられた方々から、事の真相について『証言』していただき、その生なまのお話によって新しい昭和経済史を綴ってみよう」（はしがき）という狙いのもとに安藤氏自身が「聞き役」にまわり、氏

安藤良雄氏の人と学問

の指導をうけた三和良一、星野誉夫氏等が協力者となって編集された書物である。上・中巻は「戦前・戦時編」下巻は「戦後編」となっている。語る人は各巻二五人〜三〇人となり重複をのぞいても七〇人をこえる大人数のぼっている。

アカデミーの世界ではこのような「証言」をつくることは、作成者の努力をみとめるにしても「学問的業績」としてはあまりみとめられないものである。しかし本書をみると各項ごとに「かいせつ」が加へられ「対談の前に」として「語る人」のプロフィールが描かれている。その項目はたんに経済にとどまらず政治や文化にまで及び「語る人」は財界人・政治家・学者と多彩をきわめている。これら広汎な事項に解説を加え、多彩な人物のプロフィールを描くのは容易な事ではない。

「現代日本経済史」は前述のようにたんなる経済史にとどまらず政治や行政や法律などにまでその対象をひろげていた。そして資料として伝記や回顧録をひろく渉獵している。安藤氏はこの史的研究の方法をさらに追求してみずから資料をつくりあげようとしてこの「昭和史の証言」を企劃し実行にうつされたのであろう。しかしこのような企劃は実は簡単にはいかない事なのである。「語る人」に語らせるままにしておくのであるならばとにかく、「語る人」からできるだけ多くの事をひきだし、しかも歴史的な論点にまでその語る内容を引寄せようとするには多くの準備と努力を必要とする。私はこの書物をかなり利用させて貰ったが、安藤氏が本書に加えられた努力の大なることを偲び、さらにその出来ばえの見事であったことを思い本書を学問的業績として高く評価したいと思っている。

「昭和経済史の証言」を刊行されてからのち六七年には「日本資本主義の歩み」、七〇年には「大正時代（日本

歴史全集第一六卷」と「昭和史の開幕（国民の歴史 第二二巻）」を公刊され、七六年にいたって「ブルジョワジーの群像（日本の歴史 第二八巻）」を刊行された。

経済史の通史を執筆すると人物の歴史をあわせて書きたくなるのは歴史家の常であろうか。事、私事にわたって恐縮であるが、私自身も「本邦銀行史論」という銀行の通史を書いたのち「日本の銀行家」なる本を書いた。それというのも経済の基礎的過程の発展を追跡していくうちに、経済を動かす人物に思いをいたすようになるからであろうか。とくに人間、年齢を加えるとそうした傾向がますますにみえるが、「ブルジョワジーの群像」もまさしくこうしたことの所産であるかにみえる。

もっとも安藤氏の場合は「現代日本経済史」を執筆された頃から視野が広汎で前述のように経済的な基礎過程の発展の追跡とともにひろく政治・行政・法律にまでその視野がおよんでいたし、人物の諸活動についても伝記や回顧録をつかっていたから、こうした関心は比較的早くからあったわけであろう。

本書はもっともたんなる人物論ではない。むしろ財閥史のようである。安藤氏自身も「本書では日本ブルジョワジーというばあい、太平洋戦争期まで基幹的存在であった財閥の発展過程と、それにかかわる人物を中心とし、さらに教育等の問題にふれながら叙述することとした」（二二巻）と述べている。ここでとりあげられた財閥は三菱・三井・住友・安田・古河・大倉・浅野のほか新興財閥にまでおよび、そこで活動した人物、それを指導した人物が五〇人ちかく登場する。本書はもともと専門書ではなく啓蒙的性格をもつものであるが、それだけに視野の広い安藤氏の書物らしく群雄百出して面白い書物となっている。なお巻末には全国資産家一覧がついて興味深い。

安藤良雄氏の人と学問

安藤氏は右のような個人の著作のほかにも多くの論稿がある。たとえば「商工行政史」(一九五五年)ほか社史のたぐい、「社史日本通運株式会社」や「新三菱重工業株式会社史」や「日本製粉株式会社七十年史」等々がいくつもある。また晩年になると編著として「日本経済政策史論上・下」(一九七三年・七六年)や「両大戦間の日本資本主義」(一九七九年)などがあるが、これをひとつひとつ紹介することはできない。ただ編著にあっては俊秀な若い研究者もあつめ彼等をして自由にのびのびと執筆させている点の特徴となっている。もともと安藤氏の学風はリベラルであり、セミナーの指導方針でも学生に自由に発言させ、枠をはめたり、自分の学説に無理やりしたがわせたりするようなことはなかったように聞いている。事実氏のセミナーからは異端ともいうべき研究者がでてゐる。編著をあむ場合でも右のような特徴がでてきたのは氏のリベラルな人柄から自然にじみでてきた結果だといつていいであろう。

六

安藤氏は周知のように学者としての資質のほかに行政能力にもめぐまれていた。東大において経済学部長をつとめ退任後図書館長に就任したこと、経済史関係の諸学会の役員や大学設置審議会会長をつとめたことなどはその行政的手腕をかわれたからにはかならない。成城大学の学長におされたのも、氏の学識や人柄のほかに卓越した行政能力の故であろう。氏はこまかいことまで気をくばりつつ敏速にしかも適確に事を処する能力の持主であった。

安藤氏が成城大学の学長に就任されたとき、私は心からよろこんだ。それというのも私自身、成城大学の前身

である旧制成城高等学校の出身者だったからである。私は一九二八年に成城学園の小学校六年に入学し、以来成城高校の尋常科にすすみ、高等学校を卒業するまで八年間成城学園の御厄介になった。不肖の卒業生で現在の成城大学については知るところが少ないが、私が学んだ頃の成城学園は個性の尊重をかかげ、自由な学風で知られていた。ややいいすぎになるかも知れないが、私のように自分の好きな学科しか勉強しない者にとっては願ってもない学園であった。この母校に学識にすぐれ、行政能力に卓越し、しかもリベラルな気風をもつ安藤氏を学長にむかえることは、不肖な卒業生である私にとっても、このうえもない喜びであった。

ところが一九八四年一〇月五日、氏は名古屋で心筋梗塞の発作に襲われた。安藤氏は頑健無比というわけではなかったが、学長としての責任感の故か健康に留意し摂生につとめられていた。いろいろ健康法もとりにいれておられわれわれの仲間のなかでは丈夫なほうであった。その安藤氏が倒れたと聞きわれわれは驚愕した。その後小康を得て帰京され杏雲堂に入院されたとき私は何度か氏を見舞った。その際、私が切に安藤氏に忠告したことは、一刻も早く学長を辞任し、療養に専心されたい、ということであった。さらにお互いもういくばくもない余生を楽しもうではないか、とも言った。

安藤氏は多趣味な人でもあった。絵画についても一見識をもっていたし、なかならず造詣が深かったのはクラシック音楽であった。一度酒の席で冗談まじりに「もう一度生まれかわってきたときは、オーケストラのコンダクターになりたい」とももらしておられた。ワグナー協会の会員でもあったし、音楽文化の会のメンバーでもあった。定年を間近にひかえた私は、暇と健康をとるもどした安藤氏とともに音楽会めぐりをすることを夢みていた。

安藤良雄氏の人と学問

しかし責任感の強い、しかも仕事好きで安藤氏は微笑するのみで、あいかわらず病床にあって学長の職務に尽瘁された。そして三月下旬から病状は悪化し四月二日に日本医大附属病院に移られたが病状は好転せず五月六日ついに逝かれたのである。

私は茫然とするとともに無念でもあった。何故に万事を放擲して養生專一にとめられなかったのか、と口惜しくも思った。しかし静かに思いなおしてみると、この生き方は如何にも安藤氏らしいとも思えた。病苦のなかにあつて、強靱な精神力をもつて病魔と戦い、なお職務につくされるのは、人間として、男として、まさに見事だ、とも思えた。

いまや氏は天にあって静かに憩こわれていられることであろう。切に冥福を祈りたい。